

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00448

研究課題名（和文）リベルタン文学が18世紀フランス社会およびフランス革命に与えた影響についての研究

研究課題名（英文）Study of the influence of libertine literature on 18th century French society and the French Revolution

研究代表者

関谷 一彦（SEKITANI, KAZUHIKO）

関西学院大学・法学部・名誉教授

研究者番号：40288999

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：（1）18世紀フランスで開花したリベルタン文学のパイオニアであり、後世にも大きな影響を与えたジェルヴェーズ・ド・ラトゥシュ著『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』（以下『ドン・B***の物語』と略す）の翻訳を関西学院大学出版会から上梓した（2024年3月）。（2）リベルタン文学が18世紀フランス社会およびフランス革命に与えた影響について、「訳者解説」という形で詳説した。そのなかで、リベルタン文学は単なるポルノ文学とは異なり、当時の社会に対する鋭く、激しい批判が描かれていることをテキストから論証した。こうした批判精神こそ、フランス革命へと導くひとつの要素ではないかと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

（1）リベルタン文学のパイオニアであり、その後ディドロ、ヴォルテール、サドにも影響を与えた『ドン・B***の物語』は、日本では未訳であるだけでなく、これまで解説すらなかった。その翻訳は、この作品の歴史的な重要性を考慮すると、リベルタン文学を日本に紹介するとともに、今後この領域の研究に資すると考えられる。（2）本書に掲載した「訳者解説」では、『ドン・B***の物語』の「出版と警察の捜査」「作者」「この作品の魅力」について詳説している。リベルタン文学の日本への紹介だけでなく、本書による当時のキリスト教およびそのモラル批判、フランス革命への影響についても、「訳者解説」は問題提起となっていると思われる。

研究成果の概要（英文）：(1) A translation of "Histoire de Don B***, portier des Chartreux" (hereinafter abbreviated as "Histoire de Don B***") by Gervaise de Latouche, a pioneer of libertine literature that flourished in 18th century France and greatly influenced later generations, was published by the Kwansei Gakuin University Press (March 2024). (2) The influence of the Libertin literature on 18th century French society and the French Revolution was published in the form of a "Translator's Commentary" in "Histoire de Don B***". In the commentary, I noted that Libertin's literature was different from pornographic literature in that it was sharply critical of the society of the time. I proposed that this critical spirit was one of the elements that led to the French Revolution.

研究分野：フランス文学

キーワード：18世紀フランス文学 リベルタン文学 リベルタン版画 『ドン・B***の物語』 ジェルヴェーズ・ド・ラトゥシュ サド フランス革命 キリスト教批判

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

地下文書としての「リベルタン思想」の研究は、フランスで継続的に刊行されている *La Lettre clandestine* のみならず、日本でも『啓蒙の地下文書』IとIIの刊行を始めとして、翻訳や研究が進んでいる。それに対して、同じ地下文書でも、「リベルタン文学」の研究はフランスでも遅れており、日本では目立った研究がない。その理由は、猥褻であるとして研究対象から排除されてきたからである。しかしフランスではプレイヤッド版で *Romanciers libertins du XVIII^e siècle* (『18世紀のリベルタン小説家』、第1巻、2000年、第2巻、2005年) やサドの諸作品が出版され、Jean Marie Goulemot, Michel Delon, Patrick Wald Lasowski, Colas Duflo, Jean-Christophe Abramovici らの研究によってようやく学問対象として認知されつつある。日本ではサドの作品を澁澤龍彦が精力的に紹介したが、その紹介は秘教的作品が中心であり、また抄訳が多いためサドの全体像、ましてや「リベルタン文学」の全体像を明らかにするまでには至っていない。

歴史学研究では、ダーントンは「リベルタン文学」がフランス革命前にはベストセラーの一つであったことを明らかにし、フランス革命を準備した一つの要素であると指摘している (Robert Darnton, *The Literary Underground of the Old Regime*, Harvard University Press, 1982)。しかしながら、具体的にどのように受容され、意識変革を促し、社会に浸透していったのかは明らかになっていない。「リベルタン文学」についての文学研究からのアプローチは非常に遅れており、日本では「リベルタン文学」の紹介すらほとんどなされていないのが現状である。それゆえに、「リベルタン文学」のなかで最も猥褻と言われている『カルトウジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』を翻訳・解説するとともに、「リベルタン文学」が18世紀フランス社会でどのように受容され、読者の意識変革にどのような影響を与えたのか、さらにはフランス革命にどのような影響を与えたのかを明らかにすることは重要である。「リベルタン文学」の役割や受容についての研究は、文学という個別研究の枠組みを超えて、思想、歴史、社会に関わる重要な問題である。

2. 研究の目的

ダーントンの研究によって、『女哲学者テレーズ』や『カルトウジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』などの「リベルタン文学」は、18世紀フランス社会でよく読まれていたことがわかっている。『女哲学者テレーズ』は関谷が翻訳・解説をしたが (人文書院、2010年)、『カルトウジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』は翻訳がなく、詳細な解説もない。そのため、まずは「リベルタン文学」のなかで最も猥褻であるこの作品を翻訳することによって、リベルタン文学とはどのようなものかを紹介する。それとともに、「リベルタン文学」がどのように受容され、意識変革を促し、社会に浸透していったのかを明らかにしたい。したがって、これまであまり注目をされてこなかった「リベルタン文学」、とりわけ『カルトウジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』を翻訳・紹介するとともに、こうした「リベルタン文学」が18世紀フランス社会のなかで果たした役割を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究で明らかにしたいのは、「リベルタン文学」が18世紀フランス社会にどのように浸透していったのか、どのように読者の意識変革をもたらしたのかということである。それは、シャルチエがいう「appropriation 我有化 (読書行為を通して、読者がテキストをどのように読み取り、自分のなかで内面化していくかということ)」の問題を考えることでもある。

「リベルタン文学」は1740年代には流行のようにして広まった。『心と精神の迷い』(1736)

『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』(1741)、『ソファ』(1742)、『女哲学者テレーズ』(1748)、『不謹慎な宝石たち』(1748)、『オルレアン乙女』(1752)などが書かれ、クレピヨン・フィスやラクロからディドロやヴォルテールに至るまで、まるで江戸時代の浮世絵師が春画に手を染めたように「リベルタン文学」を書いた。それはなぜなのか、その背景にはどのような時代精神があったのか、また「リベルタン文学」は「性」と結びついた文学であるが、なぜこの時代に「性」がクローズアップされたのか、深い疑問の闇が広がっている。「リベルタン」という語が17世紀では「自由思想家」という意味で使われるが、17世紀の終わりから18世紀になると、「放蕩者」という意味に変化する。このような「リベルタン」という語の意味の変遷、また「リベルタン文学」の流れから読みとれるのは、キリスト教が作り上げたスコラ的な既成の秩序を逸脱した、反キリスト教的、反宗教的な意味から、既成秩序であるキリスト教モラルから逸脱した、非道徳的、反逆的な意味である。したがって、反逆性を内在する「リベルタン文学」が、18世紀とりわけ18世紀後半のフランス社会でどのような役割を果たしたのかを分析することによって、読者の意識改革から社会の意識改革、さらにはフランス革命へと至るリベルタン文学の影響を明らかにできると思われる。

そのための方法として、上記したようにリベルタン文学のなかで最も大きな影響を与えたと考えられる『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』を翻訳・分析することから始め、分析対象をより広範なリベルタン文学に広げていく。

また、2021年4月から半年間のフランスへの留学期間中には、リヨンの18世紀研究者、とりわけREYNAUD氏とテキストの読み合わせをすることで、翻訳の曖昧な箇所を明らかにし、また「リベルタン文学」に詳しいChantal Thomas氏などのフランス人研究者と協力しながら研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 18世紀フランスで開花したリベルタン文学のパイオニアであり、後世にも大きな影響を与えたジェルヴェーズ・ド・ラトゥシュ著『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』の翻訳を関西学院大学出版会から上梓した(2024年3月)。

(2) リベルタン文学が18世紀フランス社会およびフランス革命に与えた影響について、「訳者解説」という形で詳説した。そのなかで、リベルタン文学は単なるポルノ文学とは異なり、当時の社会に対する鋭く、激しい批判が描かれていることをテキストから論証した。こうした批判精神こそ、フランス革命へと導くひとつの要素ではないかと考えられる。

(3) それ以外としては、東京の日仏会館主催のシンポジウム「文学作品に現れたフランス革命」が2021年9月25日(土)にオンラインで開催された。そのなかで、「シャンタル・トマ『王妃に別れをつけて』におけるマリー=アントワネット像——歴史小説とは何か——」という題目で発表した。その内容は、『作家たちのフランス革命』(白水社、2022年)として出版された。今回のテーマである『王妃に別れをつけて』の「マリー=アントワネット像」は、18世紀後半の政治的誹謗文書をもとにして構想された作品であり、このなかで「二人の扉番の会話」が当時の誹謗中傷パンフレットをよく表している。多くのパンフレットがマリー=アントワネットの「性」を取り上げて攻撃しているところから、リベルタン文学を考える重要なテーマであった。

(4) *Dictionnaire Sade* (Harmattan, 2021) のなかで、「Madame de Sade」、「Réception de Sade au Japon」の二つの項目を執筆した。前者は三島由紀夫の『サド侯爵夫人』の解説、後者はサドの日本における受容史である。

(5) 『啓蒙思想の百科事典』(日本18世紀学会 啓蒙思想の百科事典編集委員会編、丸善出版、

2023年)のなかで、項目「リベルタン文学」を執筆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 関谷一彦	4. 巻 19
2. 論文標題 歴史小説の試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 外国語外国文化研究	6. 最初と最後の頁 268-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 関谷一彦
2. 発表標題 シャンタル・トマ『王妃に別れをつけて』におけるマリー=アントワネット像 歴史小説とは何かー
3. 学会等名 シンポジウム「文学作品に現れたフランス革命」（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 三浦 信孝、村田 京子、小野 潮、柏木 隆雄、西永 良成、エリック・アヴォカ、関谷 一彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 244
3. 書名 作家たちのフランス革命	

1. 著者名 日本18世紀学会・『啓蒙思想の百科事典』編集委員会 関谷 一彦、長尾 伸一、上野 大樹、小田部 胤久、武田 将明、逸見 龍生他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 714
3. 書名 啓蒙思想の百科事典	

1. 著者名 ジェルヴェーズ・ド・ラトゥシュ、関谷 一彦	4. 発行年 2024年
2. 出版社 関西学院大学出版会	5. 総ページ数 328
3. 書名 カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語	

1. 著者名 Christian Lacombe、関谷一彦	4. 発行年 2021年
2. 出版社 L'Hamattan	5. 総ページ数 644
3. 書名 Dictionnaire Sade	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------